

# 日本語の疑問付加部の構造と意味に見られる一般性

黒木 邦彦

## 1 はじめに

日本語の付加部 (adjunct) のうち、*do-* ‘INTER’<sup>1</sup>, *ika* ‘如何’, *nani* ‘何’<sup>2</sup>などを含むもの (以下「疑問付加部」) は、構造的にも意味的にも多様である。次のようなものまで視野に入れると、それこそ枚挙に暇がない:

- (1) どの#くらい/程度, どんな#風=に, どんな#感じ=に/で, どんな#状態=に/で, { どんな / なん=の }#目的=で, なん=の#ため=に, なん=の#せい=で, なん=の#お陰=で, どの#よう=に#して, どんな#風=に#して, etc.

●=: 接語 (clitic) の境界; ●#: 語の境界; ●{ X / Y }: X ないし Y

ただし、日本語の疑問付加部の構造と意味には一定の傾向が見られる。たとえば、<理由> を問う疑問付加部の多くは、次のように疑問語を含む句ないし節に由来する:

- (2) a. *ika*={ ni / de } ‘如何=ALL/INST’ (中古和文語); *nan*=de ‘何=INST’ (現代標準語; 以下「標準語」); [[*do-o#si-ta*]*#koci*]=i ‘INTER-ADV#ず(る)-ADN.PST#事=ALL’ (南海部方言); [*nani#se-m-u*]=ni ‘何#ず(る)-IRR-NMNL’ (古代語) > *naze* (標準語; 大坪 1983)
- b. [*do-o#si-te*] ‘INTER-ADV#ず(る)-ADV.MED’ (標準語); [*nan#si-ke*] ‘何#ず(る)-ADV.PURP’ > *naike* (甌島方言)

●-: 接辞の境界; [: ]: 句ないし節の境界

そこで、本稿では、日本語の疑問付加部に関する類型論の取り掛かりとして、その構造と意味に見られる一般性を明らかにする。

なお、(1) に挙げた付加部のように、構成要素から意味が容易に理解できるものは、本稿では極力取り上げない<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 本稿で使用する略号は★頁を参照されたい。

<sup>2</sup> 複数の日本語方言から抽象した音素はイタリック体ローマ字で表記する。

<sup>3</sup> 疑問付加部相当の意味を語用論的に表す、次のような形式 (例は上甌島里方言) も除外する:

- (I) A: なんば そがん いせえで 行きよいよいと?  
‘何をそんなに急いで行ってらっしゃるの? ≒何でそんなに急いでらっしゃるの?’
- B: 息子がなあ おぶか 病気で 死んかかいいい。  
‘息子がなあ、重い病気で死にかかっている’

(次頁に続く)

## 2 日本語諸方言<sup>4</sup>の疑問付加部の構造と意味

### 2.1 中古和文語

中古和文語の疑問付加部を構造の面から分類すると、次のようになる:

- (3) a. 語: nado (< nani=to ‘何=COM’), nadefu (< [nani=to#if-u] ‘何=COM#言(う)-NMNL’)
- b. 句: ika=ni ‘如何=ALL’, ika=de ‘如何=INST’, nani=ni=te ‘何=ALL=MED’, [nani#si-Ø]=ni ‘何#す(る)-NMNL=ALL’<sup>5</sup>
- c. 節: なし

それぞれの用法は次のとおり:

- (4) 答へも せで ゐたるを ((男))「など 答へも せぬ」と 言へば ((女))「涙の 零るるに 目も 見えず 物も 言はれず」と 言ふ。  
(伊勢, 62: 145) <理由>
- (5) ((落窪))「今日 明日 御物忌に 侍る」と 答ふれば ((北の方))「あら ことごとし。 なでふ 我が 家など なき 所にて 御物忌 侍る」と 宣へば  
(落窪, 1: 79) <理由>
- (6) a. 「いかに 近からむ」と 思ひつるを されど け遠かりけり。  
(源氏, 帚木: [14] 93) <程度>
- b. ((その女は)) 上にも 聞し召しおきて 「((その女を)) 宮仕へに 出だしたてん」と 漏らし奏せし 「((その女は)) いかに なりにけん」と いとぞや 宣はせし。  
(源氏, 帚木: [14] 91-92) <状態>
- c. かの 人も 「いかに 思ふらん」と いとほしけれど  
(源氏, 空蝉: [14] 119-20) <内容>
- d. 君は 「いかに 謀りなさむ」と まだ 幼きを 後めたく 待ち臥し給へるに ((小君が)) 不用なる由を 聞こゆれば  
(源氏, 帚木: [14] 105) <方法>

---

(II) A: こん 騒ごおば なんの ことか?  
‘この騒ぎようは何のことだ? ≒この騒ぎようは何で?’

B: 今 まいお 打つおった 子の 死んで あがん 騒ぐたい。  
‘今、鞆を突いてた子が死んで、あんなに騒いでるんだ’

<sup>4</sup> 本稿で利用する方言資料は★頁を参照されたい。

<sup>5</sup> 筆者は、名詞節 nani#si-Ø に助詞 =ni が付いた助詞句と見做す。副詞節 nani#si-ni ‘何#する-ADV.PURP’ と分析できるが、助詞 =ni とは別に動詞接尾辞 -ni を認める点で記述の経済性を欠く。これは他の方言でも同様である。

- e. ((父))「いかに かく 籠りおはします。 ((中略))」。少將 「あな かしこ。何か つきなき ことも 侍らず。日頃 乱り心地の 例にも 似ず 侍れば 内裏の 方にも 参らで 籠り侍るなり」。  
(うつほ, 嵯峨院: [10] 255) <理由>
- (7) a. 天竺に 二と 無き 鉢を 百千萬里の 程 行きたりとも いかでか 取るべき? (竹取: 34) <方法>  
b. 「かうまでも いかで 聞えじ」と 思へど 「上の 御心に 背く」と 聞こし召すらむ ことの 安からず いぶせきを 「ここにだにも 聞え知らせでやは」とて なん。(源氏, 若菜下: [16] 406) <理由>
- (8) a. 手 なくば 何にてか 木の 実 葛の 根をも 掘らん。  
(うつほ, 俊蔭: [10] 80) <道具>  
b. 衛門 「三郎君と 聞こえしは 今は 何にてか おはすらむ? 御冠やし給へる?」 ((侍従の君))「しかじか この 春なん 大夫と 言ふめる」  
(落窪, 3: 181) <資格>
- (9) a. ((童))「何しに この山には 有るぞ」と 問へば ((俊陰))「魚釣りに 來つるぞ。御許に 食はせ奉らんとて」と 言へば  
(うつほ, 俊陰: [10] 77) <目的>  
b. ((かぐや姫))「ここに 心にも あらで かく 罷るに 昇らんを だに見送り給へ」と 言へども ((翁))「何しに 悲しきに 見送り奉らん。我を いかに せよとて 捨てては 昇り給ふぞ。具して 出おはせね」と 泣きて 伏せれば 心惑ひぬ。(竹取: 64) <理由>

(8) のとおり, <材料> を問う nani=ni=te の例は見当たらない。しかし, N=ni=te が次のように <材料> を表すことから, nani=ni=te も同様であると考えられる:

- (10) 御返しも その 色の 紙にて 御前の 花を 折らせ給ひて 付けさせ給ふ。  
(源氏, 梅枝: [16] 162) <材料>

『日本古典文学大系』のテキスト データを調べた限り<sup>6</sup>, <目的> を問う nado, nade fu, ika=ni, ika=de は見当たらなかった。

<sup>6</sup> 調査にあたっては, 次の作業を行なった:

- (III) a. 「資料」(p. 9) に挙げる中古和文語のテキスト ファイルを「秀丸エディタ」(URL: <http://hide.maruo.co.jp/software/hidemaru.html>) で開く。  
b. 所望の形式を検出するため, 次の正規表現で grep を実行する:  
[きぎしちひびみりけげせぜてでねへべめれ](行|来|來|参|参|まゐ)

表 1 中古和文語の疑問付加部の用法

	ika=ni	ika=de	nani=ni=te	nani#si-Ø=ni	nado nade fu
程度, 状態, 内容	✓				
方法	✓	✓			
道具, 材料, 資格			✓		
目的				✓	
理由	✓	✓		✓	✓

## 2.2 標準語

標準語の疑問付加部を構造の面から分類すると、次のようになる:

- (11) a. 語: do-o ‘INTER-ADVLZ’, naze  
 b. 句: naN=de ‘何=INST’, ika=ni ‘如何=ALL’, do-re=dake ‘INTER-NLZ.物=だけ’, do-Nna=ni ‘INTER-ADNLZ=ALL’, [nani#si-Ø]=ni ‘何#す(る)-NMNL=ALL’  
 c. 節: [do-o#si-te] ‘INTER-ADVLZ#す(る)-ADV.MED’, [do-o#jaQ-te] ‘INTER-ADVLZ#や(る)-ADV.MED’

筆者の内省に拠れば、標準語では、疑問付加部 (11) を用いた質問文に対して、次のように答えると思われる:

- (12) A: 東大に 入るのが { いかに / どんなに / どれだけ } 難しいか 分か  
 かってるの?  
 B: { 凄く / 日本で 一番 / 阪大に 入るより } 難しいって ことくらい  
 知ってるよ。 <程度>
- (13) a. A: 酒を 飲むと どう なるの?  
 B: { 元気に / 顔が 赤く } なるの。 <状態>
- b. A: 研究発表の 前に 酒 飲むって どう 思う?  
 B: 普通の ことだと 思うけど。 <内容>
- c. A: この 料理は どう (cf. どう やって) 作ったの?  
 B: 『美味しんぼ』を 見て。 <方法<sup>7</sup>>
- (14) A: そんな ところに なぜ 行くの?

<sup>7</sup> -eba 節内では <方法> を問う doo の許容度が上がるように感じる:

- (IV) a. [どう 作れば] 良いの? <方法>  
 b. [どう 作れば] 良いか 分からない。 <方法>

- B: { ちょっと 旅行に/で / 魚を 釣りに / 興味本位で / 珍しい 魚が  
いるから }。 <目的; 理由>
- (15) a. A: この 料理は なんで 作ったの?  
B: { この 鍋で / 鶏肉で / 出来心で / 喜ぶと 思ったから }。  
<道具; 材料; 理由>
- b. A: そんな ところに なんで 行くの?  
B: { 電車と バスで / ちょっと 旅行に/で / 魚を 釣りに / 興味本  
位で / 珍しい 魚が いるから }。 <道具; 目的; 理由>
- (16) A: そんな ところに 何 しに 行くの?  
B: { ちょっと 旅行に/で / 魚を 釣りに } (cf. { 興味本位で / 珍しい 魚  
が いるから })。 <目的>
- (17) A: そんな ところに どう して 行くの?  
B: { 興味本位で / 珍しい 魚が いるから } (cf. { ちょっと 旅行に/で /  
魚を 釣りに })。 <目的; 理由>
- (18) A: この 料理は どう やって 作ったの?  
B: { 『美味しんぼ』を 見て / この 鍋で }。 <方法; 道具>

表 2 標準語の疑問付加部の用法

	ika=ni do-Nna=ni do-re=dake	do-o	do-o#jaQ-te	naN=de	nani#si-Ø=ni	naze do-o#si-te
程度	✓					
状態, 内容		✓				
方法		✓	✓			
道具			✓	✓		
材料				✓		
目的					✓	
理由				✓		✓

### 2.3 九州方言

本節では、筆者が現地調査で得た資料 (cf. p. 9) に基づいて、九州方言の疑問付加部の構造と意味を記述する。ただし、§2.1-2.2 とは異なり、挙例は割愛する。

### 2.3.1 日田方言<sup>8</sup>

- (19) a. 語: do-gee ‘INTER-ADVLZ’, nasi(k/te) (< [naN#si-k/te] ‘何#す(る)-ADV.PURP/MED’)
- b. 句: do(-ri/e)=siko ‘INTER(-NLZ.物)=だけ’<sup>9</sup>, naN=de ‘何=INST’, [naN#si-Ø]=ni ‘何#す(る)-NMNL=ALL’
- c. 節: [do-gee#si-te] ‘INTER-ADVLZ#す(る)-ADV.MED’
- (X): Xは選択要素 (e.g. nasi(k/te) = nasi, nasike, or nasite)

表3 日田方言の疑問付加部の用法

	do(-ri/e)=siko	do-gee	do-gee#si-te	naN=de	naN#si-Ø=ni	nasi(k/te)
程度	✓	✓				
状態, 内容		✓				
方法		✓	✓			
道具			✓	✓		
材料				✓		
目的					✓	
理由			✓			✓

### 2.3.2 南海部方言<sup>10</sup>

- (20) a. 語: do-gee ‘INTER-ADVLZ’
- b. 句: nani=i ‘何=ALL’, naN=de ‘何=INST’, [naN#si-Ø]=ni ‘何#す(る)-NMNL=ALL’, [[do-o#si-ta]#koci]=i ‘INTER-ADVLZ#す(る)-ADN.PST#事=ALL’
- c. 節: naN=zja=ki ‘何=VLZ.CCL.N’PST=RAT’, [do-ge#i-te] //do-gee#si-te// ‘INTER-ADVLZ#す(る)-ADV.MED’

<sup>8</sup> 大分県西部に位置する日田市<sup>ひた</sup>の方言。

<sup>9</sup> doresiko は近年の音形。拘束形態素たる指示語語幹 do- に =siko が付く理由は不明 (なお, =siko は連体形式に付く; e.g. ku-u=*siko* ‘食(う)-ADN.N’PST=だけ’; do-gena=*siko* ‘INTER-ADNLZ=だけ’)。

<sup>10</sup> 大分県南部に位置する旧南海部郡<sup>みなみあまべ</sup> (現佐伯市<sup>さいき</sup>) の方言。

表 4 南海部方言の疑問付加部の用法

	do-gee	do-ge#i-te nani=i	naN=de	naN#si-Ø=ni	do-o#si-ta#koci=i naN=zja=ki
程度, 状態, 内容	✓				
方法	✓	✓			
道具, 材料			✓		
目的				✓	
理由			✓		✓

### 2.3.3 甌島方言<sup>11</sup>

- (21) a. 語: *do-geN* ‘INTER-ADVLZ’, *naike* (< [*naN#si-ke*] ‘何#す(る)-ADV.PURP’)  
 b. 句: *naN=de* ‘何=INST’, *do=iko* ‘INTER=だけ’<sup>12</sup>  
 c. 節: [*naN#si-ke*] ‘何#す(る)-ADV.PURP’, [*do-geN#si-te*] ‘INTER-ADVLZ#す(る)-ADV.MED’

表 5 甌島方言の疑問付加部の用法

	<i>do=iko</i>	<i>do-geN</i>	<i>do-geN#si-te</i>	<i>naN=de</i>	<i>naN#si-ke</i>	<i>naike</i>
程度	✓	✓				
状態, 内容		✓				
方法		✓	✓			
道具, 材料				✓		
目的					✓	
理由						✓

<sup>11</sup> 串木野新港 (鹿児島県いちき串木野市) の西方約 40km の東シナ海上に浮かぶ、<sup>こしきしま</sup>甌島列島 (同県薩摩川内市; <sup>かみ</sup>上甌島, <sup>なか</sup>中甌島, <sup>しも</sup>下甌島などから成る) の方言。

甌島方言の音素体系, 音韻規則, 語彙は集落に拠って異なるので, 同方言の疑問付加部の音形は, 島内において一般的なもので代表させる。

<sup>12</sup> 拘束形態素たる指示語語幹 *do-* に *=siko* が付く理由は不明 (なお, *=siko* は連体形式に付く; e.g. *ku-u=siko* ‘食(う)-ADN.N’PST=だけ’; ただし, 日田方言とは異なり, *\*do-geN=siko* ‘INTER-ADVLZ=だけ’ とは言わないようである)。

### 3 考察

#### 3.1 <方法> から <理由> へ

<理由> を問う疑問付加部のうち, (i) 中古和文語の *ika=ni* と *ika=de*, (ii) 標準語の *doo#site*, (iii) 日田方言の *nasite* (<*nan#site*>) と *dogee#site* は, <方法> を問う形式に由来する。これらのうち, 標準語の *doo#site* と日田方言の *nasite* は <方法> 用法を失い, <目的; 理由> 用法に特化している。

#### 3.2 <目的> から <理由> へ

<理由> を問う疑問付加部のうち, (i) 中古和文語の *nani#si-Ø=ni*, (ii) 標準語の *nani#si-Ø=ni*, (iii) 日田方言の *nasike* (<*nan#si-ke*>), (iv) 南海部方言の *nan#si-Ø=ni*, (v) 甑島方言の *naike* (<*nan#si-ke*>) は, <目的> を問う形式に由来する。

#### 3.3 副詞節から副詞へ

日本語一般の *nani#si-Ø=ni* と *do-o#si-te* は見かけの上では節であるが, 補部も付加部も取らない。日田方言の *nasi(k/te)*, 南海部方言の *dogeite*, 甑島方言の *naike* は一歩進んで, 語境界までも曖昧になっている。

これらの変化は, 日本語でしばしば起こる, 副詞節から副詞への変化に通じる:

- (22) a. [<sub>AdvCl</sub> ... *afe-te*] > [<sub>Adv</sub> *afete*] (cf. *\*afe-zu*, *\*afe-ro*, *\*afe-ru*, *\*afe-reba*, etc.)  
b. [<sub>AdvCl</sub> ... *tatof-eba*] > [<sub>Adv</sub> *tatofeba*] (cf. *\*tatof-azu*, *\*tatof-e*, *tatof-u=beku*, *\*tatoQ-te*, etc.)

- (23) [[<sub>Vbl</sub>] ... *Vbl*] → [<sub>Adv</sub> ... *Vbl*]

●Abv: 副詞; ●Cl: 節; ●Vbl: 用言

### 4 今後の展望

- (24) a. <程度; 状態; 内容> 用法と <方法; 理由> 用法を具有する *ika=ni* 型の希少性の究明。  
b. <理由> を問う疑問付加部の発生経路の究明。  
c. 標準語化に拠る *nan=de* 型の浸透。

#### 略号

●ADN: 連体-終止; ●ADNLZ: 連体詞語幹化; ●ADV: 連用; ●ADV LZ: 副詞語幹化; ●ADV LZ: 副詞・連体詞語幹化; ●ALL: 向格-与格-処格-様格; ●CCL: 終止; ●COM: 共格-様格-引用格; ●INST: 具格-処格; ●INTER: 疑問; ●IRR: 非現実; ●MED: 連結; ●NLZ: 名詞語幹化; ●NMNL: 準



体; ●NMNL: 準体-連体; ●N'PST: 非過去; ●PST: 過去; ●PURP: 目的; ●RAT: 理由

## 資料

中古和文語: 国文学研究資料館が web 上で公開している「日本古典文学本文データ ベース」(=『日本古典文学大系』の電子版; URL: [http://base3.nijl.ac.jp/Rcgi-bin/hon\\_home.cgi](http://base3.nijl.ac.jp/Rcgi-bin/hon_home.cgi)) の中の「タグ無し・傍記無し」のテキスト ファイル

日田方言: 2013 年に行なった面接調査で得た資料。被調査者は 1920 年代生まれの男性 1 名, 1930 年代生まれの男性 2 名, 1940 年代生まれの男性 1 名。

南海部方言: 2013 年に行なった面接調査と談話収録で得た資料。被調査者は 1930 年代生まれの男性 3 名と 1940 年代生まれの男性 1 名。

甑島方言: 2010-13 年に行なった面接調査 (ただし, 疑問付加部に特化したものではない) と談話収録で得た資料と, 次の文献から得た資料。被調査者は 1920-50 年代生まれの男女 20 名以上:

- 荒木 博之 (編) (1970) 『甑島の昔話』, 三弥井書店; ●池山 一美 (1991) 『ふるさとことば—方言集—』, 私家版; ●小川 辰雄 (2012) 『さとことば (里方言)』, 南勢出版; ●上甑村郷土史編纂委員会 (編) (1960) 『上甑村郷土史』, 上甑村; ●上村 孝二 (1941) 「甑島方言文例」, 『九大國文學會誌』 17, pp. 38-52, 九州帝國大學國文學研究室; ●里村教育委員会 (2003) 『郷土の民話』, 私家版; ●里村郷土史編纂委員会 (編) (1985) 『里村郷土史』, 里村

## 参考文献

大鹿 薫久 (1991) 「萬葉集における不定語と不定の疑問」, 『国語学』 165, pp. 53-66, 国語学会

大坪 併治 (1983) 「漢文訓読文におけるナゼニの成立をめぐって」, 『国語学』 132, pp. 1-10, 国語学会

---

くろき くにひこ (啓明大学校人文大学日本語文学科助教授)

E-mail: [nihon5\\_no\\_ken9@yahoo.co.jp](mailto:nihon5_no_ken9@yahoo.co.jp)

HP: <http://hotarugaikegengokenkyuuzyo.web.fc2.com/>